姫君は王子のフリをする

目次

姫君は王子のフリをする　5
番外編　そして獣は囚(とら)われる　285

姫君は王子のフリをする

プロローグ　王子と獣の攻防

「……んっ、ふ……ん……っ!!」

――暗い社長室に、甘い吐息が漏れた。熱い舌が絡まる感触に、意識が飛びそうになる。手に力が入らないのは、身体に絡みつく熱のせい。

「……柔らかくて甘いな、お前の唇」

少しだけ唇が離れた瞬間、飢えた目で自分を見下ろしている、黒い獣が見えた。まるでギリシャ彫刻のようにくっきりとした顔立ちの彼。そのぎらぎらと光る瞳に、思わず身体がぶるりと震える。

「……っ、やめて下さいっ……」

「そうやって、嫌がる顔もそそられるんだが」

大きな手が熱くなった頬を撫でる。また身体がびくっと揺れた。

はあ、と大きな溜息が彼の口から漏れた。

熱っぽい息が唇にかかる。目を見開いて硬直する『私』の瞳を、彼の瞳が真っ直ぐに射抜いた。

「お前のスーツを脱がして、俺の下に組み敷いて……」

彼が私の胸元を見る。とっくに外されたネクタイは、床に落ちていた。ぴしっと折り目が付いていたワイシャツは皺くちゃになり、第二ボタンまで外れている。その合間から見えるのは――胸を覆うさらし。

「傍から見れば、俺がお前の兄を襲ってるみたいに見えるんだろうな」

その言葉に、かっと頬が熱くなる。

長かった髪を切ってさらしを胸に巻き、男物のスーツを着ている自分の姿は、双子の兄に本当によく似ていた。その私が、こうしてソファに押し倒されてるなんて。こんな場面を誰かに見られたら、確かに兄が襲われているように見えるだろう。

「……っ、桐谷、さ……」

また唇を塞がれた。話しかけようと開いた唇の間を、強引に肉厚の舌が割って入る。

「んんっ……んあ、はあ、ん……」

舌と舌が絡まり、悪寒に似た感覚が背筋を走る。性急な舌の動きに、また私は翻弄された。身体を抱き締める腕が熱くて、それだけで蕩けそうになってしまう。

「名前呼べって、言っただろうが」

「ん、はぁ……、省、吾さ……ん……」

息が切れてまともに話せない。なんとか掠れ声を絞り出すと、彼はにやりと笑った。

「広海、いや――真琴？」

彼の視線が、強く強く私に突き刺さってきた。胸が――痛い。

「このプロジェクトが終わったら――お前をもらう」

「っ!?」
全身がかっと熱くなった。乱れたワイシャツの隙間から、彼の手が忍び込んでくる。すっとわき腹を撫でられ、思わず身を捩った。
「やっ……！」
しっかりと巻かれたさらしの上に大きな手が置かれた。この手が直接肌に触れたら……そう思うだけで、口の中がからからになる。
「最後まで兄のフリをしたいという、お前の気持ちは尊重する。だが、こっちにも限度があるからな」
「省吾、さん」
でも、あなたは……忘れられない人がいるんでしょう？　その人のことを忘れられないから、私を……
「逃げるなよ、そんなことをしても無駄だからな」
胸が痛い。この人が私を欲しいと言うのは、きっとその人の身代わりだ。それでも、心のどこかで嬉しいと思う自分がいる。
「返事は？　真琴」
低くて甘い声に、ぞくりと背筋が震えた。
ああ、この人からは逃れられない。まるで見えない鎖で全身を縛られてるみたい。
「は……い……」
小さく呟いた私に、「いい子だ」と微笑み、彼はまた唇を重ねた。

一　王子と獣の邂逅

「……専務。そろそろお時間です」
秘書の森月聡美の声に、高階真琴は顔を上げた。
「分かった」
山のように積まれた書類の確認を中断し、真琴はすっと立ち上がった。顔を横に向け、壁に掛かった鏡をチェックする。
そこに映っているのは、明るいグレーのスーツを着た、兄に瓜二つの姿。カットした明るいブラウンの髪が、ふわりと襟足に掛かっている。こちらも茶に近い瞳の色は、幼い頃亡くなった母と同じ。ドイツ人とのハーフだった母の血を、真琴達双子は色濃く引き継いでいた。
だが、いくら双子とはいえ女である自分が兄を演じ切ることなどできるのだろうか。
ふいに不安に襲われた真琴に、真っ直ぐな黒髪をきちんとまとめ、黒色のタイトスーツ姿の聡美が微笑んで言う。
「大丈夫ですよ。広海様と桐谷社長は、あまり親しくありませんでしたから。事故の影響で痩せたと言えば、気づかれることもないでしょう」
スーツの上着には肩パッド。胸にはさらしを巻いて厚みを出している。それだけで、元々スレン

ダーな体形の真琴は、見事に細身の男性に化けていた。
しかも真琴の身長は一七三センチ。女性にしては高い背丈にシークレットシューズまで履いているおかげで、一八〇センチ近くに見える。兄と比べると二センチほど低いが、一見して大差はないはずだ。
――アパレル会社、ＭＨＴカンパニー社長を乗せた車が事故を起こしたのは、二ヶ月ほど前。
社長の高階真一と社長令嬢の真琴が全治半年の大怪我を負った。同乗しつつもただ一人大怪我を免れたのが、長男の広海。軽傷だった彼は専務兼社長代理として会社の舵を取ることになった――というのが、表向きの事情。実際は、次期社長の広海の方が大怪我を負っていた。
『広海様まで現場を退かれるとなると、我が社の評判は……！』
『特に今は、あのヴェルヴとの取引を控えた大事な時期、責任者がいないという状況を作るわけには参りません！』
『お願いいたします、真琴様！』
副社長を始めとする役員に頭を下げられた真琴は、不安ながらも兄の身代わりを引き受けた。
広海はここ数年、海外支店で活躍しており、日本の本社に彼個人を知る人は少ない。
真琴もまた、ＭＨＴカンパニー社には入社せず、市立図書館に司書として勤めていた。そのため真琴が会社に顔を出したことは今までなく、実際、二人が揃ったところを見たことがある人物は、自宅に来たことがある古参の役員ぐらいだ。一時的な入れ替わりなら、一般社員には気付かれないだろうと、二人をよく知る聡美も言っていた。

『実際のプロジェクトリーダーには、現場の人間を指名します。真琴様は、契約の締結やプロジェクトの進捗状況報告といった、大きな打ち合わせにのみ出席して頂ければ……！』
『広海様が力を入れておられたプロジェクトを是非とも成功させたいのです！』
元々この「合同ブランドの立ち上げ」というプロジェクトの発案は父だったが、兄もそのために帰国し、並々ならぬ意欲を見せていたのを真琴は知っていた。だからこそ、このプロジェクトに兄の名を残す手伝いをしたい。広海が回復した時点でもう一度入れ替われば、それは可能になる。
（私では力不足かも知れないけれど、お兄様のためだもの）
広海本人は真琴が身代わりになることに最後まで反対していたが、広海が立てた計画に従うこと、状況を逐一報告すること、何か問題があればすぐに身代わりを止めることを条件に、渋々ながら承諾した。もちろん、真琴の熱心な説得があったためだ。
真琴は大きく息を吐き、聡美に軽くうなずいた。
「そうだね」
掠れたハスキーな声には、未だに慣れない。真琴は無意識のうちに包帯の巻かれた首元に手を当てていた。
事故の時に喉を打ち、高い声が出せなくなってしまったことが、今役に立っているなんて。
何が幸いするか分からないものだわ、と真琴は思った。
「真琴様。この会合を乗り切れば、次の会議まで数日間ありますよ。一度図書館に行かれてはいかがです？　気にされていたでしょう？」

「聡美さん」
聡美には隠しごとができない。ややつり目のアーモンド形の瞳に全て見透かされてしまう。
さすがはあのお兄様の秘書兼恋人ね、と真琴は微笑んだ。
「ありがとう、聡美さん。この姿で少しだけ様子を見に行くわ」
現在、真琴は職場に怪我をして休養中と届け出ているので、兄の姿のまま覗きに行くしかなかった。突然休むことになったので、みんなに迷惑をかけているかもしれない。真琴が始めた毎週水曜日の絵本の読み聞かせも、ボランティアの人が引き継いでくれたと聞いてはいるが、ずっと気掛かりだった。
まことせんせい、と慕ってくれる子ども達の顔が目に浮かぶ。穏やかな館長、厳しくも優しい『市立図書館の母』である主任や、同僚達の顔も。
――また、聞きに来ます。
ふと、背の高い影が心を過った。真琴の声が好きだ、と言ってくれた男の人。
たびたび図書館に来ては、プレイルーム横に設置された椅子に座り、真琴の朗読を聞いていた。
何となく気になっていたけれど、彼は図書館カードを作っていなかったから、名前も知らない。人目を惹く人だったが、最近見ないなと思っているうちに、今度は自分が図書館に行けなくなってしまった。
(復帰したら、また会えるかしら……)
真琴はふうと息を吐いて、表情を兄のものへと切り替えた。

「さあ、行こうか」
そう言って真琴はぴんと背筋を伸ばす。ここから先は、全て自分の腕にかかっている。自分が、兄のフリをできるかどうかに。
頭脳明晰でいつも冷静な兄に少しでも近付けるようにと、真琴は心の中で決意を新たにした。
(お兄様、お父様……私、頑張ります!)
真琴は聡美を伴い、エレベーターホールへと向かった。

今から会うのは重要な取引先である『ヴェルヴ』だ。
ヴェルヴはここ十年足らずの間に急成長したアパレルメーカーで、十代から二十代をメインターゲットとした人気ブランドを展開している。
――桐谷にお前を会わせたくない。くそっ、俺の身体さえ治っていれば、近づけさせやしないのにっ!!
ふと、兄の言葉が頭を過ぎる。広海が一番懸念していたのは、ヴェルヴの社長、桐谷省吾のことだった。
大学時代に起業したという桐谷は、やり手のビジネスマンだと評判らしい。だが、彼に関する情報は少なく、真琴が入れ替わりのための資料として見せられた写真も、顔がはっきりとは分からなかった。
『いいか、真琴。絶対、奴の口車に乗せられるな。二人きりにならないよう気をつけろ。手を出さ

れそうになったら、遠慮なく大声出せ』
普段冷静な兄が、ここまで激しい敵対心を見せることは珍しい。真琴は首を捻りながら言った。
『お兄様ったら……私、お兄様の格好してるのよ？　「男同士」で、何かあるわけないじゃない』
『その認識が甘い！　大体お前は、その年にしては社会を知らなすぎる。父さんが、世間の荒波に揉まれないよう、防波堤を張り巡らせていたから仕方ないかもしれないが』
『私、司書としてもう何年も働いてるのよ？　男性なら、あそこの職場にだっていたし……』
『あの男みたいな、獣が傍にいたわけではないだろうがっ！』
（……ケモノって）
真琴が目を丸くするのを見て、広海は重ねるように言った。
『あの男の女性関係は有名なんだぞ？　まあ、後腐れない相手ばかりを選んでいるようだが。お前みたいな箱入り娘が一人でなんとかできる相手じゃない』
『だから私、その時はお兄様の姿になっているのよ？』
もう一度言っても、兄はぶすっとした表情のままだった。

（桐谷さん……どんな人なのかしら）
第一応接室に入ると、今回のプロジェクトリーダーを務める、商品企画部部長の荒木道靖とデザイナーの遠藤祥子がすでに着席していた。大ベテランの荒木とデザイナー歴二年目の祥子を起用したのは、もちろん広海だ。立ち上がろうとする二人を右手で制し、真琴は荒木の左横に座る。ブラウンの革張りのソファは、ちょうどよい硬さだった。荒木の右横に座る祥子はタイトスカートの皺を手で伸ばし、聡美はガラステーブルの上に置かれた資料や契約書を確認している。ソファセットとホワイトボードが設置されたこの応接室は、木目張りの壁が落ち着いた雰囲気を醸し出していた。
「いよいよですね、専務」
荒木の声がどこか硬い。自分の父と変わらない年齢の荒木でも緊張するのか。
真琴は精一杯笑顔を見せた。
「この二ヶ月、至らない私を支えてくれてありがとう、荒木部長。今回も頼りにしてるよ。よろしく頼む」
「専務……！」
体格の良い荒木の目が潤んだのを見て、聡美はふふっと微笑んだ。
「さあ、本番はこれからですよ？　感動は後に取っておいて下さいな」
「そうだったね」
真琴は大きく息を吸った。準備は万端のはず。用意した契約書も資料も、すべて自ら目を通してチェックした。今日のメインイベントは契約書を交わすことだから、手が震えないよう、特に捺印の練習は何度もした。
（大丈夫、皆が支えてくれているんだから）
ドア近くでリリリ……と内線電話の音が鳴った。さっと出た聡美はすぐに受話器を置き、真琴を振り返る。

「受付にヴェルヴ社長の桐谷様、秘書の夕月様が来られたそうですわ。すぐこちらにお見えになります」
一瞬、部屋の中はぴりっとした空気になったが、荒木が真琴に力強くうなずいた。
「必ずやこのプロジェクトを成功させましょう、専務。社長のためにも」
まだ入院中の父の姿を思い浮かべ、真琴の胸が熱くなる。このプロジェクトを成功させれば、きっとお父様も喜んでくれるはず。
「ありがとう、荒木部長」
荒木が照れたように頭を掻いた。祥子の顔には微笑みが浮かんでいる。その様子を見て、真琴も少しだけ肩の力を抜いた。
その時、ドアをノックする音が応接室に響いた。真琴達はさっと席を立ち、ドア近くに立って整列する。軽くうなずいた聡美がドアを内側に開けると、紺色の制服を着た受付嬢の姿が見えた。
「ヴェルヴ社長、桐谷様と、秘書の夕月様がお見えです」
頭を下げる受付嬢の横を抜け、最初に入室して来た男性を見て、真琴は思わず息を呑む。
（えっ……!?）
黒のスーツに濃い臙脂色のネクタイ。シークレットシューズを履いている真琴よりもさらに背が高い。軽くウェーブした黒髪に、獲物を狙うかのような鋭い眼差し。まるでギリシャ彫刻のごとく端整な顔立ちだが、線の細さは感じさせず、どちらかと言えば雄々しい印象を受ける顔だった。
（この人……！）

大きく目を見開いた真琴の前に立った男は、しばらく真琴を見つめた後、口元に笑みを浮かべた。
「ヴェルヴ社長、桐谷省吾です。正式なご挨拶は今回が初めてでしたね？」
低く甘い声に、真琴の膝から力が抜けそうになった。
『野生の獣』を彷彿とさせる危険な瞳で自分を見ているのは、ついさっき思い出していた――真琴の声が好きだと言ってくれた人物だった。

＊＊＊

「専務？」
聡美の声に、真琴は我に返った。なんとか兄の笑顔を思い出しながら、桐谷に会釈する。
「よくいらして下さいました、桐谷社長。私がＭＨＴカンパニー専務の、高階広海です」
「こちらこそ、今日はよろしくお願いします」
名刺交換をしながら、真琴は必死に笑みを浮かべていた。
（しっかりしないと……！）
もし図書館でのことが会話に出ても、うっかり話に乗るわけにはいかない。あくまで兄として対応しなければ。真琴はごくりと唾を呑み込んだ。
彼の次に名刺を渡してきたのは、黒い鞄を手にした、これまた背の高い銀縁眼鏡の男性だ。桐谷の第一秘書で、夕月誠というらしい。

（漢字は違うけど、私と同じ名前なのね）
夕月は桐谷のような派手な顔立ちではないが、こちらも目鼻立ちの整った美形だった。理知的な雰囲気に抜け目なさそうな瞳。桐谷を支える敏腕秘書だと資料にあった。
ちなみに、図書館でも別の場所でも、夕月に会ったことはない。
聡美が二人を席に導く。桐谷の左隣に夕月、真正面に真琴が座り、真琴の両隣に荒木と祥子が着席する。聡美は真琴の斜め後ろで控えるように立っていた。
桐谷が真琴を真っすぐ射抜くほどの力強さで見た。どくんと真琴の心臓が鳴る。
「高階専務。お身体の調子はいかがですか？　まだ怪我が完治されていないと聞きましたが」
気遣うような声に、一瞬言葉が詰まったが、真琴は掠れた声で何とか答えた。
「まだ無理はできませんが、通常業務に支障はないと医者にも言われています。お気遣いありがとうございます」
じっと見つめる瞳に、いたたまれない気持ちになる。真琴の口元が強張ったのを見て、まだ何か言いたげな目をした桐谷に、夕月が声を掛けた。
「いい加減、高階専務を見つめるのはやめて頂けませんか。どう見ても不審者ですよ、社長」
すると桐谷が、むっとした表情になる。しかし、夕月は素知らぬ様子で、「まあ、お気になさらないで下さい。うちの社長は時々自分の世界に入り込んでしまうので」と真琴に告げる。
「夕月」
低い声で桐谷が言うと、夕月はにっこりと笑みを浮かべた。何故だかその笑みに、真琴の背中ま

でぞくりとする。
「余計なことを申し上げました。どうぞお話を進めて頂きたく」
「は、い」
この場を仕切っているのが、桐谷ではなく夕月のように思える。真琴は内心首を傾げながらも、言葉を継いだ。
「――では、今回のプロジェクトについて、プロジェクトリーダーの荒木からご説明させて頂きます」
真琴が軽くうなずくと、荒木が資料を手に取った。
「それでは、お手元の資料をご覧下さい。何かご不明な点があれば、都度ご質問頂ければ幸いです。……今回のプロジェクトのキーワード、それは――」
淀みない説明が続く中、真琴は桐谷の視線をひしひしと感じていた。
（……何か、不審に思われた？）
資料に目を通しながらでも分かってしまう桐谷のそれが気になって仕方ない。彼の方に向けている手の甲がぴりぴりした。
（最後に会ったのは、もう何ヶ月も前のことだもの。冷静に、冷静に……）
怯えを見せてはいけない。私は高階広海なのだから――そう心の中で呟き、真琴は右手をそっと握り締めた。
「……内容については、理解しました。こちらの要望も入れて頂いている。これならいい結果が望

めそうですね」
そう桐谷から言われた時、真琴は思わず大きく息を吐き出しそうになった。
「ありがとうございます。現在弊社が抱えるブランドのメインターゲットは、二十代後半から四十代の女性。どちらかといえば、シャープな印象のデザインが多いです」
真琴は話しながら、桐谷の目を真っ直ぐに見た。黒い黒い……うかつに覗き込めば溺れてしまいそうなほど、深い闇色の瞳。
「それに対し、御社は十代から二十代をメインターゲットとした若者向けのブランドを展開されています。今回力を合わせることで、互いに足りないものを補い合えるブランドを生み出すことができる、そう確信しています」
「私もそのご意見に賛成です。では、正式に契約を。夕月」
はい、と同意した夕月が鞄から印鑑を取り出し、桐谷に手渡す。聡美も同じように横から印鑑を真琴に手渡し、朱肉をテーブルに置いた。
そのまま二人は、互いに社印を契約書に押した。これで正式にヴェルヴとのプロジェクトがスタートすることになる。
ほっと力を抜いた真琴の前に、すっと大きな手が現れた。見上げると、いつの間にか桐谷が立ち上がり、真琴に右手を差し出している。
真琴も立ち上がり、彼の手を握った――その瞬間。
（――!?）

びりっと電気が走ったような感覚。
筋ばった大きな手が真琴の手を力強く握りしめる。真琴は思わず桐谷の顔を見た。
（な……に……）
――そこに浮かぶのは、紛れもなく、肉食獣の笑み。真琴はひゅっと息を吸った。
「これからよろしくお願いしますよ？　……高階専務」
その声に潜む何かに、全身の感覚が絡めとられそうになる。心臓の鼓動が痛い。
凍り付いたように固まってしまった真琴を再度救ってくれたのは、夕月だった。
「ほら、さっさと手を放してください、社長。帰社して検討すべきことが山積みですから」
じろりと横目で夕月を睨んだ後、桐谷はゆっくりと真琴の手を放した。まだ手に彼の温もりが残っているように思える。
「では、これで失礼いたします。次回お会いする機会を楽しみにしております」
そう言って微笑んだ桐谷に、真琴は必死の思いで強張った笑顔を返したのだった。

二　姫君と獣の出会い

「なかなか印象深い方達でしたね」
専務室に戻った真琴に、聡美が声を掛けた。

真琴はどさりと椅子に腰を下ろして、「ええ」と答える。ぐったりと伸びきった真琴に、聡美はすぐにコーヒーを入れ、机の上に置いてくれた。
「お疲れになったでしょう？　甘めにしておきましたよ」
「ありがとう、聡美さん」
ネクタイを少し緩めると、真琴は湯気の立ち昇るマグカップを手にした。香ばしいコーヒーの香り。温かな液体が、緊張して冷えた身体にゆっくりと沁み込んでくる。
「はあ……」
真琴はマグカップを横に置き、机の上に突っ伏してしまった。
「聡美さん。……私、前に桐谷社長と会ったことがあるの……」
「えっ!?」
驚いたような聡美の声をバックに、真琴は半年ほど前のことを思い出していた。

＊＊＊

「――そうしてお姫様は、いつまでもいつまでも王子様と幸せに暮らしたのでした。おしまい」
図書館内に、わあっという子ども達の歓声が響く。真琴は絵本を閉じて、プレイコーナーに集まった彼らの顔を見渡した。
今日集まっているのは幼稚園の年中さんぐらいの子が多い。女の子の人数が多かったので、お姫

様と王子様が出てくる絵本を朗読したのだが、どうやら正解だったようだ。
「ねえねえ、まことせんせい」
最前列で目を輝かせていた女の子が、立ち上がって真琴の傍に来た。真琴は「なあに？」と微笑みかける。
「どうしておひめさまは、おうじさまをえらんだの？」
真琴が目を瞬かせたのを見て、女の子はもう一度質問した。小さなポニーテールと赤いリボンがふるんと揺れる。
「おうじさまより、おおかみさんの方がかっこいいじゃない！」
「あー、さっちゃんはおおかみさんがいいんだー」
「わたし、おうじさまの方がいいー」
姫君をお城から攫って自分の巣穴へと連れ帰った森の狼。しくしく泣く姫君に、狼は森で採れる木の実や川で獲った魚を持ってきたが、姫君は首を横に振るだけだった。
やがて姫君を探しに来た王子に、狼は追い払われてしまう。そして王子と姫君はいつまでも幸せに……というのが先ほどの内容だったのだが。
「だって、おおかみさんはおひめさまが大好きだったんでしょう？　だから、おひめさまをひとりじめしたくて、連れていったんでしょ？　そういうの、できあいっていうんだよ！」
「で、溺愛……さっちゃん、物知りなのね」
真琴が口籠ると、ピンク色のワンピースを着た女の子が会話に割り込んできた。

「さっちゃん、おうじさまの方がいいって！　さいしゅーてきには、お金がある方がいいってママも言ってた！」
「み、みなみちゃん……」
あんまりな意見にうろたえつつも、真琴は「絵本の読み聞かせはこれで終わりね？　皆さんおうちの方のところに戻ってね」と声を掛けた。
「はーい」
あっという間に、子ども達が親のもとに戻っていく。ほっと息をついた真琴は、絵本と椅子をプレイルームの隅に片付けた。
「……あら？」
書庫の整理をしようと本棚が並ぶ閲覧エリアに近付いた真琴は、長机の前でぐったりと椅子の背にもたれる男性に気が付いた。
長い脚を投げ出し、今にもずり落ちてしまいそうな体勢だ。きっちりとした黒いスーツ姿が決まっているが、ネクタイは緩められていて、具合が悪そうに見えた。
「あの、大丈夫ですか？」
俯き気味だった男性の頭がゆっくりと上がり、ぼうっとした瞳が真琴を映した。どくんと真琴の心臓が鳴る。
――古代ギリシャの彫像みたい……
くっきりとした目鼻立ちが印象的な男だった。

ウェーブがかかった黒髪が、ぱらりと額に掛かっている。熱っぽい瞳に、やや上気した頬。少し唇が乾いているように見えた。男はしばらく真琴をじっと見つめていたが、やがてしわがれた声で呟いた。
「……大丈夫です、少し熱が出ただけですから。ここで休ませてもらえればすぐに治ります」
彼が自分で言う通り、はあと吐く息は熱っぽい。
真琴は「ちょっと待っていて下さいね」と声をかけ、事務所へと小走りに駆け出した。
「あった！」
事務所内の冷蔵庫から、冷却ジェルの袋を取り出し、再び男のもとへと急ぐ。その途中、廊下にある自動販売機でミネラルウォーターも買った。
「あの、これよろしかったら」
真琴は冷えたペットボトルの蓋を開け、男に差し出した。一瞬目を見張った男は「……ありがとう」とペットボトルを受け取り、冷たい水をごくごくと一気に飲んだ。
「これも貼っておきますか？　冷たくて気持ちがいいですよ」
真琴が冷却ジェルのパックを見せると、男は小さくうなずいた。
「……ああ……お願いします」
「失礼しますね」
パックからひやりとしたジェルシートを取り出し、男の首の後ろに貼る。彼が気持ちよさそうに目を瞑ったのを見て、真琴はふふっと笑った。

「小さなお子さんが興奮して熱を出すこともあるので、常備しているんです。子ども用ですから、長時間は持ちませんけれど」
「……いや、随分楽になりました。ありがとう」
男が居住まいを正して、傍に立つ真琴を見上げた。さっきとは違う強い視線に、真琴は戸惑いを隠せない。じろじろと頭のてっぺんからつま先まで見られている気がする。
「……あの？」
真琴が小首を傾げると、男は我に返ったような表情を浮かべた。
「ああ申し訳ない、あなたが姫君のように見えたので」
「え？」
真琴は目を瞬かせた。
半袖の白いポロシャツに、紺色のジャージズボン姿の自分が姫君？　メイクも最低限ですっぴんに近く、髪だって後ろで一つに括っているだけなのに？
（……お兄様みたいなことを言うのね）
真琴に甘い双子の兄は、彼女のことをいつも「我が家のお姫様」だと言っていた。真琴がごく稀に出席するパーティーでも、広海は真琴の騎士だからと、ずっと付き添ってくれている。
正直言って恥ずかしいが、社交界慣れしていない真琴にとって広海のサポートはありがたかった。
「……あの」
男は少し言い淀んだが、一拍おいて言葉を継いだ。

「また朗読を聞きに来てもいいですか？　あなたの声がとても綺麗で。聞いていると、落ち着きました」
「え、は、はい」
真琴の頬がかあっと熱くなった。
異性から声が綺麗などと言われるのが初めてだった真琴は、何とか返事を返すので精一杯だった。
うううと声にならない声を上げる真琴を見て、男の口角が上がる。
ふと右手の腕時計を見た男は、すっと立ち上がった。かなり背が高い。真琴が見上げなければならないほど長身の男性は、図書館勤めの同僚にもいなかった。
「あの、もう少し休んでいた方が――」
真琴の言葉に、男は首を横に振った。
「約束がありますので。色々とありがとうございました。お礼はまた今度」
空になったペットボトルを右手に持ち、男は軽く会釈してその場を去った。
真琴は彼の広い背中が図書室から出て行くのを、ただじっと見つめていた。

――その後、男は何度か図書館に現れた。子ども達が集まるプレイルームにこそ近寄らなかったが、そこから一番近い長机に座り、静かに真琴の朗読を聞く。
再会時、お礼をしたいと言われた真琴は、必要ないと断った。男の方も無理強いせず、あっさりと引いた。

それ以降、男は読み聞かせの時間に現れた。見つめられて最初は緊張していた真琴も、黙って聞いているだけの男の存在に少しずつ慣れ、『図書館の常連さん』として見るようになっていた。
それが、ある日を境にぷっつりと彼の訪れが途絶えてしまう。どうしたのだろうと気になっていたが、そうこうしているうちに、今度は真琴が図書館に行けなくなった。
またそのうち会えるかもとは思っていたが……まさか彼がヴェルヴの社長だったとは。

「それで、桐谷社長とはどんな話をされたのです？」
真琴は顔を上げ、机の傍に立つ聡美を見上げた。
「その、あまり個人的な話はしていないの。『今日はいい天気ですね』ぐらいの会話しか。だって、名前も知らなかったから」
桐谷はただ真琴の読み聞かせを聞いていただけで、それ以外にこれといった接触はなかった。
「読み聞かせの時間が始まるとふらっと現れて、終わったらすぐに帰られていたわ。多分会社を抜け出されてたのね」
その言葉に、聡美はじっと何かを考えているようだった。真琴が身代わりだとバレていないか心配しているのだろうか。真琴はふうと溜息をつく。
「でも、今の私はこの声だもの。多分気付かれてないと思うわ」
胸の奥がちくりと痛む。
桐谷に『綺麗な声』と褒められたあの声は、もう二度と出せない。事故の時に喉元を強打した影響で、ソプラノだった真琴の声は、ハスキーボイスに変わってしまっていた。おかげであまり演技をしなくても兄の声を真似られるほどだ。
「とにかくご注意ください、真琴様。広海様も桐谷社長についてご心配されていましたから」
「ええ、分かっているわ……それと聡美さん。このこと、お兄様には黙っていてほしいの。あまり心配を掛けたくないから」
真琴と桐谷が知り合いであると広海が知れば、おそらく身代わりを止めろと言ってくるだろう。それは何としてでも避けたい。ようやくプロジェクトの発足まで漕ぎつけたところなのだから。
聡美はしばらく黙ったまま真琴を見ていたが、やがて溜息と共に、「分かりました。広海様にはこの件、ご報告いたしません」とうなずいた。
「ありがとう、聡美さん」
聡美に礼を言った後、真琴は少し冷めたコーヒーに口をつけた。
ぼろを出さないようにしなければ――そんなことを思いながら。

間章　獣の裏事情

黒のＢＭＷが滑らかな動きでカーブを曲がる。省吾の繊細なハンドルさばきにも、愛車はスムーズに応えてくれた。

「……まったく、いい加減にしろよな。桐谷社長」
「何がだ？」
誠の声に、省吾は右隣をちらと見た。濃いグレーのスーツ姿の誠が、銀縁眼鏡をきらりと光らせる。
「……高階専務だよ。お前、穴が開くほど見つめてただろ。あれは不審がられるぞ？」
学生の頃からの悪友だけあって、二人きりの時の誠の言葉に、遠慮の二文字はなかった。
「久しぶりだからな……『あの顔』を見るのは」
はあ、と誠が溜息をつく。眼鏡を押さえる彼の仕草は、いつものように優雅だった。
「ったく、馬を警戒させたら、将を射止めることはできなくなるぞ。……まあ確かに、女と見紛うほどの美形だったが」
――省吾は先ほど会った高階広海を思い出す。
二ヶ月前の事故でかなり衰弱したらしく、線が細い印象を受けた。怪我が完治しておらず、まだ包帯をしているため、暑くても人前でスーツの上着を脱ぐことはないというその姿も、噂通りだ。
すらっとした体形。柔らかな印象の明るめの髪。目鼻立ちの整った『彼女』にそっくりの彼。
「『彼女』はまだ、寝たきりなんだろ？」
「ああ、そのようだな」
先ほどもさりげなく妹のことを聞いてみたが、『まだベッドの上から起き上がるのがやっとの状態で、リハビリ中』だと辛そうな瞳で言われると、それ以上何も聞けなくなってしまった。
「まあ、時間はたっぷりある。その間に高階専務の方を懐柔すればいいだろ。なにせ、妹にベタ甘の兄だって評判だからな」
「……」
自分の顔を見た時の、広海の表情。一瞬とても驚いていたように見えた。さらに握手を交わした時の、あの手の感触は。
かつてパーティーで見た広海の姿を思い起こす。省吾の視線から妹を庇うように立ち、鋭い視線をこちらに投げてきた。確かに『彼女』と同じ顔をしているが、雰囲気はもっと鋭くて攻撃的だった。
（印象が違う……）
先ほどの会合で、澄んだ栗色の瞳に見つめられた時――思わずぞくり、と来た。まるで、『彼女』に見つめられたかのようだった。あの柔らかで優しい『彼女』に。
「『お姫様』に会えないからって、『王子様』に手を出すんじゃねーぞ」
誠の言葉に思考を遮られる。
「王子？」
「高階専務のあだ名だよ。端整な顔立ちに立ち居振る舞いも優雅、ＭＨＴカンパニー社内には『王子』ファンが大勢いるって話だ」
省吾は眉を顰めた。確かに中世の王子の衣装を着せれば、似合いそうだが。
「お前と違って、品行方正らしいぜ？　浮いた話一つないらしいからな」
「余裕がないだけだろう。事故からまだ二ヶ月しか経っていないんだからな」
大体、俺とは違うってどういう意味だ、と省吾が言うと、ふふんと鼻で笑われた。

「女タラシの異名を持つお前とは違うって意味だ。来るもの拒まず、だったからなお前」
「それは過去の話だ」
「ま、確かに最近仕事一筋だっていうのは、認めてやるよ」
これも『お姫様』効果だな、と誠が笑った。
省吾は黙って前を向いていた。

自社製品のデザインも手がける省吾は、当時ひどいスランプに陥っていた。
気晴らしにと専門書を読みに訪れた図書館。そこで子ども達に絵本を読んでいる彼女を見掛けた。
柔らかそうな栗色の髪に栗色の瞳。陶器のように白い滑らかな肌。薄いピンク色の美味そうな唇。
そして――とても優しい声と微笑み。
彼女を見た途端、一気にイメージが降りて来た。それはまさに、『雷に打たれた』ような感覚。
かっと身体が熱くなり、思わず近くに置いてあった椅子に座り込んだ。
イマジネーションが湧く時にたびたび起こる、感覚の暴走だ。頭が勝手にフル回転し始め、色彩が次から次へと目まぐるしく浮かんでは消える。
この状態になると、知恵熱に似た症状が現れる。体温がどんどん上がってくるのを自覚した。
だが、集中して絵を描ける環境が整っていない今、ここでイメージを吐き出すわけにはいかない。
省吾は目を瞑り、ぐったりと椅子の背に身を預けた。
――どのくらい時間が経ったのか。

「あの、大丈夫ですか？」
あの声だ。省吾が視線を向けると、さっき本を読んでいた女性がすぐ傍に立っていた。
（……姫、君……？）
柔らかくて温かい、それが第一印象だった。
白のポロシャツに紺のジャージズボンという姿なのに、どこか品の良さが滲み出ている。
ひっつめにしている栗色の髪は、柔らかそうだ。抜けるように白い肌。ああ、ドレスを着せたら映えるだろう。繊細なシフォン生地を重ねた薔薇で飾った、艶やかなシルク生地のシンプルなドレス。ごてごてした飾りはいらない。ドレープメインのデザインで、透けるレースを重ね、生地の質感を表現。色は雪のような温かい白にして――……
ふと、彼女が心配そうに首を傾げるのが目に映った。イメージに溺れそうになっていた省吾は我に返り、何とか声を出した。
「……大丈夫です、少し熱が出ただけですから。ここで休ませてもらえればすぐに治ります」
体調が落ち着いたら会社に戻り、そこで全て吐き出せばいい。そうすればこの、体内で燃え盛るような熱も冷めるはず。
そんなことを思っているうちに、彼女は「ちょっと待っていて下さいね」と言って、小走りにその場を離れていった。
しばらくして戻ってきた彼女は、省吾にペットボトルを差し出した。受け取ったミネラルウォーターを省吾は一気に飲み干す。渇ききった喉に、冷たい水が沁み込んでくる。

彼女に冷却ジェルを勧められ、首の後ろに貼ってもらった。ひんやりとした指が、心地よく肌に触れる。ミネラルウォーターと冷却ジェルのおかげで、随分と頭の熱は引いた気がする――身体の中の熱は、一向に静まる気配がなかったが。

省吾があの柔らかな声を褒めると、彼女は頬を赤く染めた。恥じらうその表情に、どくんと心臓がひときわ強く跳ねる。瞬間、腹の底から湧き上がって来たのは、理屈など何もない激情だった。

――俺の、ものだ――

それは、今まで付き合った女性達にも感じたことのない感情。

この笑顔を他の男に見せたくない。このまま連れ去りたい。自分だけのものにしたい。

どちらかと言えば、女性から迫られる側だった省吾にとって、会ったばかりの女性にここまでの執着を覚えるのは初めてだった。彼女を見ているだけで、イメージの海に溺れそうになる。そんなことは、今までなかった。

省吾は彼女をじっと見つめた。首から下げている名札に印字された名前をさりげなく読み取る。

（高階、真琴……？）

聞いたことのある名だ。それもつい最近。一体どこで？

（戻ったら調べてみるか）

ふと腕時計を見ると、社に戻る時間になっていた。この後は取引先との打ち合わせがある。

省吾は立ち上がり、彼女――真琴に礼を言い、後ろ髪を引かれる思いで図書館を後にした。

そしてヴェルヴ社に戻り、誠に確認したところ、提携を検討している候補社の一つ、ＭＨＴカンパニー社の社長令嬢の名前が、彼女と同じであると判明したのだった。

――煌（きらめ）くシャンデリアの光。軽やかに流れる音楽。華やかなドレスを身に纏（まと）った女性達に、歓談する男性達。

経済界の大御所が主催するパーティーには、一流企業の社長や有名女優など、テレビで見かける顔も大勢参加していた。省吾がこういった社交の場に出るのは、久しぶりのことだ。

「駆け出しの頃、伝手（つて）を頼ってあちらこちらに潜（もぐ）り込んでいたのを思い出すな」

「ああ」

省吾はパーティー会場に視線を走らせた。黒のタキシード姿の二人に、会場の女性達から熱い視線が飛んでいたが、省吾本人はまったく気が付かない。

「今日は提携候補の社長も何名か出席している。挨拶だけでも交わしておいた方が……おい」

軽く二の腕を小突かれた省吾は、「何だ？」と誠を苛立たしげに見た。

「お前、まったく聞いてないだろ。何に気を取られてるんだ？」

「別に――」

と言い掛けた省吾の目に、一組のカップルの姿が飛び込んできた。思わず息を呑む。

遠目にも背の高いカップルだった。女性が身に纏（まと）っているのは、シンプルなパステルグリーンの

ドレスだ。身体の線を露わにしたノースリーブの身ごろに、ドレープが綺麗に入った、背面の長いスカート。その裾がフリルのように揺れている。

すっと伸びた白い首に、高く結い上げた栗色の髪。涙型のエメラルドが、耳元で光を反射していた。傍らのタキシード姿の男性に微笑みかけている、あの女性は、あの時の。

――彼女だ。

熱い何かが腹の底から湧き上がってくる。

化粧っ気のない素顔も美しかったが、ドレスアップした今の彼女は、まさに『お姫様』だった。

低めのヒールを履いた足の立ち位置も、パールがちりばめられたクラッチバッグを持つ手も見とれるほど綺麗で、品の良さを感じさせた。

「省吾？　あれは確か……ＭＨＴカンパニーの高階専務の」

視線を追った誠が顔をじろじろと見てきたが、省吾はまったく意に介さない。思わずそちらに歩き出そうとした瞬間、それまで横を向いていた男性が省吾の視線を捉えた。

彼女と同色の栗色の髪に栗色の瞳。そして、同じ顔――だが、その表情は、彼女とはまったく別人だった。省吾を真っすぐに見据えた男は、口元をやや強張らせた。

省吾と男の視線が交わる。相手を切り裂かんばかりの鋭い視線にも、省吾は目を逸らさなかった。

男との対峙はほんの数秒だったが、どうやら彼は省吾を要注意人物だと認定したらしい。省吾の視線を遮るように身体を動かし、彼女の二の腕を掴んでさっさと会場を出て行ってしまった。

省吾がぐっと拳を脇で握り締めると、誠がはあと深い溜息をついた。

「お前、かなり警戒させたんじゃないか？　彼は高階広海――ＭＨＴカンパニー社の次期社長だぞ。睨まれてどうする」

「あの男が一番の障害だな」

省吾のセリフに、誠が眼鏡の奥の瞳をすっと細める。

「お前が長いスランプから抜け出せたのは、さっきの『お姫様』のおかげか。今までのデザインとは傾向が違うと思ったが、彼女に合わせたものだというなら納得だ。確かにイメージに合っている」

図書館から戻った省吾は、部屋に閉じこもってデザインを描きに描きまくっていた。

長らく新作を生み出せていなかった省吾の急変に、誠もデザイン部の部長である神谷瞳も目を丸くしたものだ。大学時代からの友人である二人の目は誤魔化せない。

省吾は「ああ、彼女だ」と素直に認めた。

「ったく、よりによって騎士に守られた姫君に惚れるとは、厄介な」

誠は眼鏡を右手で押し上げ、省吾に言った。

「確認するが、ＭＨＴカンパニー社との話は進めていいんだな、省吾？」

「ああ、そのつもりだ」

誠はしばらく黙ったまま考え込んでいたが、やがてにやりと口の端を上げた。

「その方が面白くなりそうだな。分かった、契約に関しては俺がやる。お前はあちらに専念しろ。やっと見つかった女神なんだろ、彼女」

今も身体の奥で燻り続けている炎。こんな感覚は本当に久しぶりだ。純粋にイメージに没頭して

いた、かつての自分を思い出す。社長業をこなすようになってから少しずつ忘れてしまった何かを、彼女は思い出させてくれた。
「必ず成功する、いや成功させる」
省吾の言葉に、誠も力強くうなずいた。そして二人は、会場の中央で歓談している高階社長のもとへと足を運んだのだった。

――高階社長に提携を持ち掛けたところ、相手も大いに乗り気になった。しばらくして、一人で会場に戻ってきた広海の方は、先ほどの件でこちらを相当警戒しているらしく、プライベートで打ち解ける気はないといった態度だったが。そんな彼も、このプロジェクト自体には可能性を感じる、帰国して自分が手掛けると宣言してくれた。
そうして着々と準備を進めていた時に起きた、あの事故。
彼女が怪我をしたと知った時、省吾の中の炎は凍り付いてしまった。再びまったくイメージが湧かなくなってしまった省吾に、周囲はかなり焦っていたが、こればかりはどうしようもない。
真琴にとって省吾は、『図書館の常連の一人』に過ぎず、彼女が面会謝絶の状態では、押しかけるわけにもいかなかった。
事情があり図書館に行けなくなってしまった矢先の事故。命に別状はないと聞いているものの、真琴に会えないまま過ぎる時間に焦る。だから、ＭＨＴカンパニーから、中断していたプロジェクトを再開し、正式に契約すると連絡があった時には、ようやくかと安堵の溜息をついた。

プロジェクトはもちろんだが、彼女の様子も聞きたい。怪我の具合や経過を知りたい。そう思いながら、本日ＭＨＴカンパニー社へ向かった……のだが。
現れた『高階広海』の雰囲気は、以前の彼とはまったく違っていた。
あの攻撃的な態度も敵対心もない。省吾に対する態度は、やや緊張していたことを除けば、ごく一般的なものだった。
（それにあの表情……あの手の感触……）
再び自分の奥に灯った炎。今なら、社に戻ってからいくらでもデザインを描けそうな気がする。
『彼女』に会った時と同じ感覚を、何故『彼』に？
（……）
胸に違和感を抱きつつも、省吾はヴェルヴ社に向かって車を走らせたのだった。

三　王子、ヴェルヴを訪問する

――一度我が社においで頂けませんか？
秘書の夕月から連絡があったのは、契約の会合から数日後のことだった。
「実は我が社のデザイナーのホープ、SHOW（ショウ）は社外に出ることがないのですよ」
ショウの名は、真琴も知っている。ヴェルヴお抱えの専属デザイナーで、いくつもブランドを抱

えているにもかかわらず、まったく表に姿を見せないことでも有名だった。
「本来でしたら、こちらが赴いて今後の方針についての打ち合わせをしなくてはならないのですが」
はあ、と夕月が電話口で溜息をつく。
「ショウは社内でなければ、実力を発揮できない性格でして。ご足労頂くことになり、大変申し訳ございません」
「いえ、それでしたら喜んでお伺いさせて頂きます。できればヴェルヴ社内の見学もさせて頂けると、ありがたいのですが」
どうせなら、と真琴は言った。
「もちろん、歓迎いたします。どうぞ我が社をご覧になって頂きたい」
さっそく、真琴に聡美、そして祥子の三人で、翌日ヴェルヴを訪問することが決まったのだった。

「ここがヴェルヴの本社……」
写真ではこの活気を撮影することができないだろう――真琴は目の前にそびえ立つガラス張りのビルを見上げ、そう思った。
ヴェルヴ本社は、ＭＨＴカンパニー社から車で三十分ほど離れたビジネス街の一角にある。
元々埋立地だったこの場所には、創立十年以内の会社が多いため、社員も若いらしい。
青空が映り込むほどの全面ガラス張りのビルが多く、近くには緑の木々に囲まれた石畳の広場があり、そこのベンチで軽食をとっている人もいる。

一階ロビー横に広がるオープンテラスに目をやると、首に社員証を掛けた人が何人も、モーニングコーヒーを楽しんでいた。スーツを着ている社員もいれば、ジーンズに長袖シャツ、といった社員まで。アパレルメーカーだけあって、服装や髪型の規定も自由なようだ。この場ではグレーのスーツを着た真琴の方が珍しく見える。
社員層は二十代が多そうだ。
「かなり開放的な雰囲気ですね」
聡美はいつもと同じ、紺のタイトスカート姿だ。敏腕秘書に相応しい格好だが、ここでは浮いてしまいそうな気配がする。
自由と個性、それがこの会社の特徴なのだろう。
「若者をターゲットに急成長を遂げた会社だけありますね、専務」
大きな鞄を左肩から下げた祥子も、活気に圧倒されたかのように呟いた。
（本当に、若い会社なんだわ……）
ＭＨＴカンパニー社は老舗だけあり、成熟した雰囲気の会社だ。粗削りだが弾けるようなエネルギーが溢れているこの会社とは対照的と言えるかもしれない。
「専務、あちらに」
「……あ」
聡美の視線を追いかける。少し離れたオープンテラスのテーブルに、若いスタッフと意見交換している荒木部長の姿があった。

背広の上着を脱ぎ、ワイシャツの袖も捲り上げて、拳を振るうように熱弁している。あんなに熱く語っている荒木を見たことがなかった真琴は、思わず目を丸くした。
「専務!?」
真琴の姿を捉えた荒木が、周りのスタッフに断りを入れて、こちらに歩いて来た。つられて周囲の視線が真琴に集まってくる。
荒木はすでにヴェルヴ本社に出向いており、プロジェクトの立ち上げや運営方針について、先方と詳細をまとめているところだった。そういえば真琴が訪問を告げた時、「是非専務にもこの雰囲気を味わって頂きたい」と言っていたような気がする。
（ヴェルヴの社員から、今回のプロジェクトにかかわる人材を選びたいって言っていたけれど）
「随分と熱が入っていたようだね？　荒木部長」
真琴がそう言うと、荒木が照れたように鼻の頭を掻いた。
「いや、昔を思い出しましてね……あんな無茶やった時代があったなあ、と」
「ものすごく生き生きされてませんでした、部長？」
祥子が茶目っ気たっぷりに言うと、いやあ参ったな、と荒木がまた笑った。
「なかなか良い人材が揃っています。立場に関係なく自由に意見を言える風通しの良い社風が、若手を育てているのでしょうね」
荒木の表情が、取引先の値踏みをするそれになった。様々な案件の照査を行う企画部部長の目は、鋭く現状を解析する。広海もそんな彼の手腕を信頼していた。

「ですが、まだまだ成長途中の会社らしく、企画運営の経験とノウハウは我が社の方が上ですね」
「そうか。提供するなら、その辺りかな」
こちらが有するノウハウを共有すれば、ヴェルヴ側の人材育成にも繋がるだろう。代わりに、ヴェルヴの若さが持つ活気と新たな視点をこちらに取り込めば、双方にとって良い関係が築けるに違いない。
真琴が考えを巡らせていると、次第に周囲が騒がしくなってきた。女性社員のきゃあきゃあ叫ぶ声が漏れ聞こえてくる。
「専務。そろそろ中に入った方が良さそうですよ？」
「え？」
荒木の声にきょとんとした真琴を尻目に、聡美と祥子がさっと周りを見た後、目を合わせてうなずいた。
「御自覚ないんですね、専務。森月さんの御苦労が分かります……」
「ええ、もう大変ですよ？　これだけの容姿にもかかわらず、まるで無頓着ですから」
……何故だろう。ものすごく『残念な子』扱いされてる気がするけれど……
首を傾げる真琴に、聡美が笑いながら言った。
「さあ、参りましょう。忙しいデザイナーさんを待たせるわけにはいきませんから」
「ああ」
四人は中央入り口のガラスの自動扉をくぐる。その後ろ姿を、何人もの女子社員が熱っぽい瞳で

追っていることなど、当の真琴はまったく気が付いていなかった。

「こちらがデザイン部でございます」

受付嬢に案内された所は、ヴェルヴの地下二階だった。高い天井に白い壁。地下にもかかわらず、明るくて開放的な雰囲気のする場所だ。

エレベーターを降りると、インターフォンの付いた白い扉があった。そこに掲げてある黒のプレートには、金字で『デザイン部』と記されている。

荒木がドアの横にあるインターフォンを押した。

『はいデザイン部……荒木さん⁉　もしかして、高階専務が来られましたか？』

「はい。秘書の森月、デザイナーの遠藤も一緒です」

『すぐ開けますので、お待ち下さい』

インターフォンがカチッと切れる。

「デザインは企業機密ですからね。セキュリティカードを保持していない社員は自由に入れないのですよ」

外から室内に入る場合は、インターフォン下にあるパネルにカードをかざすらしい。

荒木がそう説明し終わったところで、ドアが中から開いた。

「お待たせいたしました、どうぞお入り下さい」

首からカード入りのストラップを下げた女性が、真琴達を見てにっこりと笑った。

一歩足を踏み入れた真琴達を待っていたのは――戦場、だった。

「ちょっと！　このジャケットの襟、色番違うわよ！　もう一つ淡い色って言ったでしょう⁉」

「レースの種類はこれでＯＫですか、神谷さんっ」

「幅が狭いわね……あと五ミリ広いのに変更！」

「はいっ」

「こっちのデザインの型紙、できましたっ！」

「じゃあ、すぐ試作に取り掛かって！」

デザイン部内は、喧騒に包まれていた。

広い部屋は倉庫のように、布やリボン、釦といった素材の入った箱が山と積まれており、ずらりと並んだミシンからは、騒々しい音が響いている。

机の上で型紙を作成する男性にパソコンを操作する女性など、作業している面々はみな真剣な表情をしていた。壁は一面本棚で、ファイリングされた資料がずらりと並べられている。

その中心にいるのは、艶やかなカールをなびかせた、ぱっと人目を惹く女性。豊満な身体のラインがはっきりと分かる、黒いパンツスーツ姿の彼女は、きびきびと周囲に指示を出していた。

「神谷さん、ＭＨＴカンパニー社の高階専務がお見えになりましたよ？」

ドアを開けてくれた女性が声をかけると、ぱっと彼女は真琴の方を見た。

「……まあああああああっ‼」

女性の表情が、眩しいぐらいに輝いた。

そして真琴の傍に駆け寄り、うっとりとした目つきで見上げる。
「ようこそおいで下さいました。私、ヴェルヴのデザイン部部長を務めております、神谷瞳と申します」
「初めまして。MHTカンパニーの高階広海です」
互いに名刺を交換する。名刺入れに仕舞いこんだそれからは、ほんのりと薔薇の香りがした。
「お会いできて本当にうれしく思います、高階専務。ところで、ものは相談なのですが、モデルをされるおつもりは？」
「は!?」
突然の神谷の申し出に、真琴は目を丸くした。
「し、しかし、ヴェルヴのブランドは十代から二十代の女性をターゲットにした、ふわかわイメージの商品で、男性物は……」
ふふふと神谷が妖艶に微笑んだ。真っ赤なルージュが華やかな印象の彼女によく似合っている。
「ええ、今まではショウを中心として、少女テイストのブランドを展開してきましたけれど」
にっこりと微笑む神谷を見た真琴は、『エサを前にした肉食獣』を思わず連想した。
(桐谷さんといい、神谷さんといい……ヴェルヴって肉食系が多い会社なのかしら!?)
「申し訳ございませんが、神谷さん？」
聡美がついっと真琴の横に立ち、こほんと咳払いをした。
「高階と遠藤はデザインの打ち合わせを控えておりまして、時間がございません。そのお話は、また後ほどにして頂けますか？」
「まあ、これは失礼いたしました。秘書の森月さんとおっしゃったかしら？」
「はい」
二人の間にバチッと火花が散った気がした。
真琴はタイプの違う美女二人が、口元だけで微笑みながら睨みあうのを呆然と見つめる。
「ふふ……なかなか手ごたえのある人材が揃っておりますのね、御社には。さすがは老舗ですわ」
「まあ、神谷さんこそ有名ですよ？　ショウをはじめ、御社のデザイナーを一手にまとめ上げる、凄腕のコーディネーターだと」
周囲が凍り付きそうな冷たい微笑みを交わす二人に、真琴は恐る恐る声をかけた。
「神谷さん。時間がないのもそうですが、私はまだ事故の傷が完治していません」
「専務!?」
聡美を制して、真琴は神谷に話し続けた。
「まだ包帯をしている関係上、肌が見える服は着られないのです。森月はそれを知っているので、私を庇ってくれておりまして」
神谷の表情から、攻撃的な色が消えた。
「それは……知らぬこととはいえ、失礼を申し上げました」
「いえ、お気になさらないで下さい」
すっと頭を下げた神谷に、真琴は微笑みかける。

やがて頭を上げた神谷だったが、その瞳には、先ほどと違う色が宿っていた。
「ですが、モデルの件は考えて頂けないでしょうか。今度の新作は肌が見える服装ではありませんので、ご安心下さい。高階専務はまさにぴったりなのです……ショウの描いたデザインに」
「「ショウ!?」」
荒木と祥子が同時に声を上げた。
「今まで女性向けデザインしかしてこなかったショウが、男性物を……」と祥子が呟いた。
「どうぞ、本人から話を聞いて頂けますか？　……ショウは奥の小部屋でデザイン中ですので」
神谷が示した広い空間の奥には、セキュリティカードで開けるタイプの扉があった。机や人を避けながら、神谷が奥の部屋へと案内する。
白い壁に囲まれたスペースは、見たところ広い会議室ぐらいの大きさがあるようだ。扉以外は窓一つなく、完全に周囲から独立した空間となっている。
設置されたインターフォンを神谷が押そうとした瞬間、ドアが外側に開き、不機嫌そうな声が響いた。
「おい瞳、このデザイン画……っ!?」
真琴は目を見開いた。中から出てきたのは、よれよれのシャツにぼさぼさ頭、少し無精ひげの生えた……
「……桐谷社長!?」
「な、んで、ここにっ……!?」

立ち読みサンプルはここまで

桐谷も、真琴を見て絶句した。
彼と同じく絶句している面々を見ながら、神谷はにんまりとチェシャ猫のような笑みを浮かべた。
（まさか、ショウって……!!）
真琴は呆然と桐谷を見上げていた。桐谷も動揺しているように見える。
「……あの、イチゴとレースをモチーフにした、女子高生に大人気の『Berry＊Kiss』も……？」
祥子の声が裏返っていた。
『Berry＊Kiss』は、ピンク色を主体とした、ポップで可愛い作風が女子高生に大人気のブランドだ。
「ええ！　我が社が誇るデザイナー、ショウの作品ですわ！」
心なしか、神谷の声はうきうきしているように聞こえる。
真琴は口を開くこともできず、ただ桐谷を見ていた。
この男っぽい人が……あの、可愛らしいブランドのデザイナーっ!?
（い、イメージ、違いすぎませんかっ!?）
真琴の思考は完全に停止していた。
荒木も祥子も聡美も衝撃から回復することができず、誰も、何も言わない。
（――こ、この場合、何と言えばいいのかしら!?）
黙り込んだ真琴の前で、桐谷がくしゃりと頭を掻いた。
「……瞳。お前、わざと訪問日ずらして教えたな」
睨みつける桐谷の視線にも動じず、神谷はほほほ、と高笑いをした。